
魔法少女リリカルなのは－仮面の騎士の望むもの－

マチノデ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは一仮面の騎士の望むもの一

【Nコード】

N7179L

【作者名】

マチノデ

【あらすじ】

プロジェクトF・A・T・E、その計画には本来では造られなかった人物がいた。

その人物、仮面を取り付けた騎士が望むもの。それは……一人の少女の幸せ。

プロローグ 仮面騎士の誕生秘話（前書き）

筆者の処女作になります。よければ、ご意見などお待ちしております。
なお、原作キャラの性格が一部異なる可能性が出ています。あらかじめ、ご了承ください。

プロローグ 仮面騎士の誕生秘話

薄暗い部屋の中に二人の男と女がいた。

二人の前には、二組の培養液の入ったカプセルに浮かぶ人の姿。その中に浮かぶのは、目の前の二人と同じく、二人の男と女。いや、体格が小柄なことから少年と少女、というべきだろうか。

カプセルの中に浮かぶ二人を見ながら、女は恍惚とした表情で呟く。

「……一つは失敗、性別が男になってしまっているわ……でも……
アリシア……やっと……あなたに会える……」

紫色の髪を長く伸ばす女性は感極り、その瞳に涙を浮かべて少女の姿を眺めている。

余程嬉しかったのか、その口元は微かに微笑んでいた。その余韻を壊さぬよう、もう一人の男は

忙しなくコンソールを静かに、且つ素早く叩いて情報を集め、笑みを浮かべる。女とは違った意味で

喜びの笑みを浮かべる男は、己に背を向けながらも喜びに身体を震わせる女に対して声をかけた。

「プレシア女史。感動の余韻を壊すようですまないが少しいいかな？」

プレシアと呼ばれた女性は、震わせていた身体を止め、目尻に溜まった涙を拭って努めて冷静になろうとありながら出来そうにも無い

事に苦笑を浮かべて振り返る。その振り返った表情を見た男は驚いていた。元々、プレシアの美貌は美しかった。だが、今までは焦燥のためか眉間に皺が寄り、鋭い眼光で常に睨んでいる印象を受けていた為、全体の容姿までは見ていなかったのかもしれない。今のプレシアの表情は、眉間に皺が寄っていないどころか穏やかな雰囲気まで纏っている。

女には興味は無くとも、芸術、そう、一種触れてはならない、一瞬の芸術のような美しさを見た男、ジェイル・スカリエッティは見惚れていた。

「どうかしたの、ジェイル。……この子に何かあったの?！」

「あ、いや……こほん、完成に喜び嬉しさがこみ上げているのは分かるが少し落ち着いたらどうかな。

……まあそれはいい。この子”達”には特に異常は見当たらなかったよ。」

「……………そう。ならば何かしら。今は、一人でこの喜びをかみ締めたいのだけど」

「うむ、先ほど異常がないか検査を行ったのだが、この子達には……アリシアには無かった魔力資質が

出ている。私としては人造魔導師の可能性が見えたので構わないがね」

「……なんだ、そんなことなの……構わないわ、そんな些細なこと。

あの子が……アリシアが私の前で微笑んでくれるのであれば小事よ」

「そうかい? 研究主導者の君が言うならば私も構わないが……ところ

でプレシア女史。

君の愛しい幼子は良いとして、こちらの少年はどうするんだい？」

ジェイルの言葉に、どうしても良さそうな視線をもう一つのカプセルに向けるプレシア。

その視線の先に浮かぶ男の子は、横に浮かぶ女の子よりも少しだけ齢を重ねているのか、少年の中では体つきは良いものだった。元になった素体と同じ者だったからか、少年と少女の容姿は似通っている。男女差があるため、全てが同じということは無かったが、同色の髪の色をしている事などから、兄妹と言われても違和感は無いだろう。

「その失敗作は要らないわ。……けれど、そう……その子にも魔力資質はあるの……」

なら、ちょうどいいわ。貴方の目的の人造魔導師としてのプロトタイプや記憶転写の実験台に
しましよう。」

「それは素晴らしい！！記憶転写とは言わず、戦闘技術のインストールも出来ないか
試してもいいのかい？！」

「構わないわ。どうせそれは失敗作。……私にはこの子、アリシアさえいてくれたら……」

もう一度、幸せになりましたよう……アリシア」

そう呟きを残して、愛おしげにカプセルに浮かぶ少女を眺めるのに

は興味を失くしたのか、ジェイルは狂喜の笑みを浮かべてすらいた。この時には、既にどのような技術を仕込むか、仕込むだけでは駄目なので技術を、技能を磨かせるためにも実践経験が必要であることなどに思いを馳せる。

ジェイルの中では、遺伝子研究による人造魔導師の研究プランが作成されていた。

カプセルの中の少年、少女の完成を見た日から数日、少年を一頻り弄りこれ以上の満足を得るためには自分のラボで行うことにしたジェイルは早々にプレシアの元から去っていった。その頃のプレシアは、記憶の転写が済み、新たな生を受けた少女・アリシアとの生活を楽しんでいた頃だった。

「ほら、アリシア……そんなにこぼして食べていると汚いわよ……持ち方は以前にも教えたでしょう？」

「あ……なんだか持ち辛くて……母さん、”こっちの手”で食べてもいい？」

「あら……あなた、左利きだったでしょう……？」

「え……？ うーんと……こっちの方が食べやすい、かな」

「そう…仕様の無い子。なら持ちやすいほうで食べなさい」

「うん、ありがとう！母さん！」

……………

「あら、アリシア？本なんて読んで外で遊ばないの？」

「うん、この本を読んでいるほうが面白いから…それに身体を動かすのって楽しいけど…」

「そう…あまり本ばかり読んでいないで、外でも遊ばないと駄目よ？」

「…はい」

「前は…あんなにも元気にはしゃいでいた子が…本を…？」

その生活に、少しの違和感を残しながら。

違和感を覚え、その正体を探り始めると直ぐに分かった。

初めは、まだ記憶が安定してはいないためかとも思っていたアリシアの性格。

アリシアは、もっと元気で、明るい子だった。

――あんなに大人しくはなかった。

アリシアは、聞き分けが悪く、わがままで手のかかる、可愛い娘だった。

――あんなに聞き分けが良い、手のかからない良い子じゃなかった。

アリシアは、左利きだった。

――決して、右利きではなかった。

アリシアは、アリシアは、アリシアは。

あの子は、あの子は、あの子は。

違和感を探ると、どんどん、どんどん、増えてくる。

一つ、新たに増える度にあの子はアリシアにはなれない紛い物であるということ。

突きつけられているような感覚になってしまう。

一つ、違和感を覚える度に、アリシアが遠くに行ってしまう。

このような考えが、プレシアの中に産まれるまでには、そう長い時間では必要ではなかった。もちろん、彼女の中にも少女を、娘として接し、多少の違いがあったとしてもアリシアとの生活が送れる。

そういう想いはあっただろう。だが、あまりにも多すぎた違和感。それは、少女と娘を別の存在だと思わせるには、充分過ぎる要素だったのだ。

一度、想いの中で違うものだと判別されてしまうとあとは坂を転が

り落ちる勢いで行動は移された。

プレシアの心の中で、少女とアリシアはイコールでは無くなった。だが、同じ見た目をしていることから娘を思い出してしまふ。どうすればいいのか。簡単なことだ、殺すか、放り投げるか、手駒として使えばいい。

幸いにも少女は魔法資質に秀でていた。

戦闘訓練を施せば、それなりのものにはなるのだろう。

仮初ながらも、母であるプレシアの血を受け継いでいるのだから。使い魔である山猫、リニスに一切を任せればいい。

そうだ、ジェイルが残っていたお人形がもう一体あった。

仮にも天才科学者のジェイルがこれ以上は無い、と思ったほどに詰め込んだのだから使えるはず。

起動させてリニスとあの子の世話をさせよう。

そう思考を切り上げ、新たな可能性にして最後の希望。アルハザードの死者蘇生技術。昔であれば、そんな御伽話に縋るようなことも無かったかもしれない。だが、彼女にはもう時間が無い。過去の事件で娘を失って以来、無理をし過ぎて肉体がついて来れていないのだ。今から新しい可能性の模索をしている時間は無い。ジェイルの存在がアルハザードの存在の裏づけにもなっていることや、肉体の治療技術も、アルハザードならば、と考えてしまったのも要因だろう。

最後の希望をかけて、プレシアは、戻れぬ道を踏み出した。

いつかと同じ、薄暗い研究室。いつかとは違う、片方だけ空いているカプセル。

この子の記憶を消さなければいけない。プレシアは、女性に抱えられている少女に眼を向け、無言でカプセルに入れるよう指示を出す。

少女を抱える女性の名はリニス。かつての事故で、アリシアと共に命を落とした山猫だった存在。

プレシアの手によって、使い魔として新たに誕生した、女性。彼女……リニスは、抱えている少女をカプセルに入れて、優しく髪を撫でた。

「ん……」

「アリシア……大丈夫ですよ、少し体調チェックを行うだけです……ね、プレシア？」

「……………ええ、そうよ」

もう、あの子はアリシアとは呼ばない、呼んでいた記憶を消すための調整、などと言うことはリニスには言っていない。当然、言うて反対するためだ。記憶の改ざんが済んだら、リニスには少女を一人前の魔導師にするよう主として命令を下すつもりだった。

いつまでも少女から離れないリニスに部屋に戻るよう告げ、機械の操作を始める。記憶の転写が出来たのだから、一部分の削除はたや

すぐ行えた。

建前として言ったメディカルチェックを進め、結果が出るのを待つばかりとなったプレシアは、もう一方のカプセルに浮かぶ少年…とはもう呼べないまでに成長している青年を起動させた。

液体の排出音とともに、意識の覚醒を見せ始める青年に対し、プレシアは何の感慨も無く、それどころか表情すらも特に浮かべていない目で眺めている。

やがて、全ての液体が排出され、カプセルの前面部がスライドされる。

そこからすぐに起き上がり、辺りを見回していた青年は、プレシアの姿を見つけると頭を垂れた。

「問わせて頂きたい。貴女は私の創造主か」

「……造られた存在である自覚がある…？ ジェイルも中々面白いことをするわね…」

「……」

「つと、無視して悪かったわね。あなたの言うとおり、私が創造主。早速だけどあなたにはやってもらいたいことがあるわ」

「先の無礼、失礼しました。今このときより、私は貴女の願いを叶えるための存在になります。

それが私の役目とあらば、そのための存在であればこそ、拒否する理由など有り得ません」

「そう……なら、あそこに浮かぶ……」

突然、話を止めたプレシアの様子に戸惑いを見せる青年。そんな青年は視界に映っていないのか、辺りを見回し始め、ある書類を見つけたプレシアの口元に笑みが浮かぶ。そう、既にアリシアでは無い少女の名前を探していたのだ。自らが与えてやるほどの愛情は、彼女の中には残っていないかった。

彼女の視界に映った書類、それには「プロジェクトF・A・T・E」の文字。

「………創造主様？」

「ああ、ごめんなさいね。そのカプセルに浮かぶ”フェイト”を魔導師に育て、守ってやって欲しいの。どんなことから」

「……分かりました。私は、この生が続く限り、フェイトを守り、育てることを誓いましょう」

「ええ…お願いするわ。……デザイア」

「…デザイア？」

「あなたの名前よ。意味するところは…私の個人的な希望をあなたにも期待していることから」

「……有り難く、頂戴いたします、主」

恭しくまた頭を下げる青年…デザイアを見ていたプレシアは眉を顰めた。やはり、アリシアの面影を残す面構えをしていることに起因するものだ。少なくとも、デザイアには何度か会う必要性を感じているプレシアは、調度近くにあった仮面を放り投げた。

「デザイア。主として追加の命令よ。私の前では、出来る限りその仮面を付けなさい。」

「承りました。今、付けてもよろしいですか？」

「構わないわ」

プレシアの返答を待って、仮面を一度眺める。

口元は開いたタイプの、白い仮面…いや、頭から被るように出来ていることから仮面といえるかは微妙かもしれないが。特徴としては騎士のように、鼻を覆う部分は鋭くとがっていて、後頭部を覆うくらいの仮面である、ということくらいだろうか。

眺めていた時間は僅か。デザイアは、仮面を付けた。

今、一人の少女を守る仮面の騎士が誕生した。

プロローグ 仮面騎士の誕生秘話（後書き）

仮面のイメージはゼクス・マーキスの仮面です。

第一話 母の想い（前書き）

少し、話のテンポを上げるために描写が少ないかもしれませんが、会話分ばかりです。

第一話 母の想い

あの、騎士の誕生から数日。少女とりニス、いや、フェイトとりニスはまだ会っていないかった。いや、より正確に言うならば、会わせられていない、だ。記憶の部分的な消去、それをりニスにはまだ伝えられていなかったからだ。

「…主。決めかねていることは重々承知しています。ですが…悪戯に時を重ねることは…主にとっても悪化を残すのみとなります」

声の方向に視線を向けると、言いつけ通り仮面を被っている青年、デザイアが佇んでいる。

口調こそ、落ち着いているように聞こえるがその言葉の端々で気遣うようなものが見えるだけに、プレシアは苦笑するしかなかった。起動してから僅か数日。にも関わらず、心配されるほどに迷っていることが分かってしまっている、ということだろう。

この分だと、リニスも何か気付いていても可笑しくは無い、が、少し抜けているところがある姿を思い浮かべて、また一つ、プレシアは苦笑した。

僅かな時間だったが、デザイアはプレシアに対して忠義をもって接していることがよくわかった。それがインストールされたものか、ということまでは分からなかったが。今の、気遣うような態度も一度や二度ではない。どうやらジェイル・スカリエッティは本当に騎士としてのもののインストールをしていたらしい。

この分だと、戦闘の面でもかなりの期待が持てるのだろう。事実、

少し身体を動かしているところを眺めていたが、よく動いていた。確認など、その程度で充分だった。守ると誓ってくれたのだから、深く探る必要性を感じなかっただけでもあったが。

返答が無いことにじっと視線を向けてくる騎士に再度、苦笑を向けて手を振り下がらせ、プレシアは念話でリニスを呼んだ。

リニスが来るまでの間に、アリシアだった少女：フェイトについて、考えていた。

少し時間を置いてから考えてみると、やはり憎しみも確かに存在するが、それと同時に愛おしさもやはりある。少しの時間とはいえ、寝食を共にしていたのが原因か、はたまた、娘の如く、愛情を持つて接していたため、非常になれなかったのが原因か。それも、今となっては分からないものだった。

もはや、これから先にフェイトに愛情の類を向けることは無いだろう。

ならば、最後の手向けに二人の補佐をつけてやろう。
それが、せめてもの母からの贈り物なのだから。

そう考えていた時に、扉のノックの音が聞こえた。

扉を開いて現れたのは、予想通り、少し厳しい眼をしてプレシアを見る女性、リニスだった。

以前とは異なり、薄暗くカプセルが置かれていた研究室ではなく、資料が乱雑に置かれている場所。研究室ではなく、何かの資料を保管するような場所だったようだ。今は、何かを探していたのだろうか、資料が手当たり次第にひっくり返されていて、見る影も無くなっている。その場所に、二人の女性の口論が響き渡っていた。

一人は、妙齡の、全体的なイメージ色が紫の美女、プレシア・テスタロッサ。

もう一人は、いつもならば帽子で頭の猫耳を隠している、これもまた美女と呼んでも差し支えの無い女性、リニス。

この口論の原因、プレシアがアリシアだった少女の記憶を消したことを告げた事によるものだった。

「なっ……あの子から記憶を消したとはどういうことですか!？」

「そのままの意味よ、リニス。あの子からアリシアと呼ばれた記憶、それを消したわ」

「そんなことを聞きたいのではありません!! 何故、アリシアの記憶を消す必要があったのですか!」

「あの子が! アリシアではない存在だから! だからリニス、もうあ

の子をアリシアと呼ぶことは許さないわ」

「なっ…あなたは言っている意味が分かっているのですか！あの子の存在を否定するというのはですか！」

「そうよ、私が間違っていることも、命を蔑ろにしていることも気づいているわ。それでも！私にとって…アリシアが全てなのよ…。」

「……………プレシア…」

「…私はもう道を戻れない。私に残されている時間が戻ることでさえも許さないわ。最後の希望、アルハザードにかけるわ」

「時間が無いって…まさかプレシア！身体が…もう!？」

「…………ええ、どうやら無理をし過ぎたみたい。このまま無茶を続ければ長くはないわ」

「そんな…そんなになるまで…どうして放置していたんですか…」

「…………。だから、というわけでもないけど、正直あの子…フェイトには構っている暇は無いわ…」

リニス、こんな私があの子の親でいれる筈が無い。だから、あなたには、あの子の世話をしたいの。」

「フェイトというのは…アリシア…いえ、あの子の新しい名前ですか？」

「そうよ。いつまでもアリシアと呼ぶわけにはいかなかったから…。」

「……そう、ですか……。ということは親代わりをしろ、ということですね……」

「……ええ。それと、フェイトには魔力資質がかなりあるようなの。その使い方も……。そうね、生きる力も必要になってくるだろうから、その指導も。…助手は用意しているわ」

「助手、ですか？」

「ええ、デザイア！入ってきなさい」

助手という言葉に、この庭園の中には自分達のみだったはずだ、と首を傾げながらも素早く帽子を頭に被るリニス。

彼女は、なんとなくではあるが、それらを露出していることが恥ずかしいようだった。怒りで気にしていなかったものが、落ち着くと思いついてしまったようだ。

そんなリニスの葛藤など露知らずに呼び声とともに研究室に姿を現す、仮面をつけた人物。

薄手のコートを纏い、下は黒のスラックスの出で立ちで現れた人物は、そのままプレシアの前まで歩みを進める。

自然警戒の視線を向けてしまいうリニスを手で制し、プレシアは自身の前で膝を折って礼を取る仮面の青年、デザイアに告げた。

「デザイア、前に私が言った内容を言いなさい」

「……フェイトを守る、それが主より頂いた誓いです」

「っ…」

三者三様、それぞれが違った反応を見せた。いや、三人のうちの二人は、似たような反応だった。当たり前前のことを聞き、当たり前前のことを返した。ただそれだけなのだから。

だが、もう一人、リニスだけは違った。物言いに、言い知れぬ威圧感のようなものを感じてしまったのだ。

コートに、騎士のような仮面の男が、主人の前に跪く姿はさながら、女王陛下に跪き臣下の礼を取る騎士のような印象を受けていた。

「この男、デザイアがフェイトを守り、共に育てるものとなるわ…いいこと、リニス？…リニス？」

「は、っはい！続けてください」

「…まあいいわ。デザイアと共に、フェイトを一流の魔導師にまで育て上げる事。それが済んだら…あなた達は自由よ。それが、あなた達の、立場は違えど、主として命令する最後のことよ」

「さ、最後だなんて…プレシア、そんなことを言うのはやめて下さい…私と、あなたと、アリシアとフェイト！みんなで暮らせるように頑張ると、そういつてください！」

「それが出来るほど、世の中は甘くは無いの、リニス。…分かれとは言えないし、言わないわ。でも、聞くだけは聞きなさい」

「聞く耳持たず、ですか…？…そこまで決意を固める前に…何故、私に一言相談してくれなかったんですか…」

「……悪い、とは…思っていたわ」

「…………、分かりました、プレシア。

私が、貴女のもう一人の娘を…フェイトを、育てます……」

「……これで…安心して…のめり込めるわね…リニス、それからデザイア。

これより先の私は…もう、今までの私ではなくなる…。

ふふ、全てをアリシアのためだけに投げ出してみせる。だから、あの子をお願いね」

プレシアの、決意というには脆く儚過ぎる言葉。彼女は、既に今までの自分とは決別した、つもりでいた。その彼女の決意を覆すことが出来るものなど、娘のアリシアをおいていないだろう。

それを分かっているからこそ、リニスはただ流れる涙をそのままに、何度も頷きを返してただけだった。同じく、デザイアも、関わりこそ少ないものの、感じ入るものがあつたためか、跪いた体勢から動かず、僅かに頭を垂れなおした。その、静かな泣き声のみが響く空間を破るのは、改めて守ることを決めた仮面の騎士、デザイアだった。

「主よ、我が創造主よ。私は、主が望む限りのことであればどのような無茶も応える所存。だが…主よ。貴女のその想いは、守り人たるフェイトにまでも危害が及ぶ可能性がある。その場合の対応はいかに？」

このようなことを聞くのは誓った言葉に対しての侮辱でもあるだろう。だが、そう、感じ入ったものがあつたからこそ、想定しうる事の対処を聞かねばならなかった。

憤りを感じながらも、僅かに身体を震わさせて押さえつけるようにしているのも、主が、主では無くなる可能性すらも考慮に入れてしまわねばならないほど、力の無さを痛感していたからに過ぎない。そんな騎士の胸中を知ってか知らずか、苦笑を浮かべて、再度、プレシアは告げる。

「言ったはずよ、デザイア。フェイトを守りなさい。リニスと、あなたを残すこと。」

それが私から出来るせめてもの贖罪よ」

「…はっ…：相違無く…承り、ました…：」

「…：話はそれでおしまいよ。ほら、研究の邪魔だからさっさと出て行きなさい。リニス！あなたもいつまでも泣いているの？早く出て行きなさい！」

話は終わった。それであれば、先ほどまで纏っていた我が子と思うような慈しむのも最早無用のものとなったのだろう。プレシアが纏ったそれは狂気。一瞬でもアリシアとの生活が出来たことにより、更なる絶望を味わった彼女が纏うそれは、禍々しかった。

いつまでも動き出そうとしないリニスを、デザイアは掴み上げて出口に向かって歩き出す。

突然のことにも驚きを残したのみで、抵抗も何もしないリニスの心の中はいかほどのものかなど、分かるはずも無い。そう時間も経たないうちに、出口まで歩んだデザイアは、リニスを出口に立たせて、

プレシアに身体を向ける。

たとえば、彼女が正対していなくても関係など無い。これは、別れの言葉では無いのだから。

「主よ、息災で」

ただ一言を残し、騎士は一人、部屋を去っていった。

その姿に触発されたかのように、リニスも自らの脚で立ち上がり、プレシアに言葉を向ける。

「…元気で、というのも変かも知れませんね。プレシア…いつか、また”あなた”に会える日を願っています。…それまで、フェイトは預かりますね」

先ほどまで泣き崩れていた姿が嘘のように、優しい笑みを浮かべた山猫の使い魔は言う。

再会を願う言葉と、冗談を残して、彼女もまた、部屋を去っていった。

自分以外が誰も居なくなった部屋で、プレシアは、一人天井を見上げた。

「馬鹿な使い魔に、馬鹿な息子…。ねえ、アリシア。あなたにも紹介してあげたいな…」

その弦きを聞くものはおらず、自然、音は闇に混ざった。

第一話 母の想い（後書き）

母の想いは複雑でした。

以前は優しかった人が豹変するのにはある程度理由があります。
そこを書けていたら幸いです。

しかし文章って書くの難しいです。

第二話 自己紹介（前書き）

説明文ばかりが目立っている気がしてなりません。

第二話 自己紹介

プレシアの部屋から、フェイトがぐっすりと眠り、幸せな夢を見ている場所に続く道が無言のまま突き進む仮面の青年、デザイア。彼は、表情から今の胸中を悟られることの無い仮面に、ましてや涙を流した顔を見せることの無い仮面に、今だけは感謝していた。

その彼の背中を追いかける足音が聞こえようと、足を止めることは無かった。

「ま、待ってください！」

息を整えながらの、普段の彼女からは想像する事が難しい声色で呼び止める声が通路に響いた。

さすがに、声を掛けられてまで無視することが出来なかったのか、素直に歩みを止めて、追いついてくるのを待った。止まってくれたことに安堵の笑みを浮かべながら、走る速度を緩めて息を整えるリス。その彼女の前には、振り向き、正対する仮面の青年がいた。改めてみても、怖いという感情こそ湧いては来ないが、何か読めないものがあり、どうしても警戒してしまう。

「……何か」

デザイアは、努めて平静であろうとしたせいか自然と声が低くなっってしまったことに、僅かながら驚いていた。この世界に覚醒してから未だ数日、だが知識は人並み以上にあるデザイアにとっては、動

揺れていたことにも驚いていたのだ。

それはリニスも同様だった。初めて、自分に向けて放たれた声が不機嫌そうな、低い声。加えて、何か突き放すような言葉に、知らずに喧嘩腰になってしまっていた。

もつとも、それもすぐに霧散されてしまうのだが。

「な、何か、ではないですよ！ てっきり外で待っているかと思えば
どンドン先に行ってしまったって…」

「む……すまない」

「あれ……意外ですね…そんなものを付けているからもう少し、
思っただんですが…」

「……これは私の趣味ではない。主の命だ」

「プレシアの？………」

予想外の謝罪、リニスにとってはマスターにあたるプレシアの奇異な命令、僅かな会話の中で二つもの予想外な言葉に怒りなど何処かに消えてしまっていた。

しかし、趣味ではない、といった時の青年の様子にもまた、疑問を覚えた。抵抗や、諦念のようなものは無かった。

趣味ではないのにつける理由が分からなかったリニスは、これからの仲間とも、家族とも言えるような関係になる人に、少しだけ、踏み込んでみた。

といっても、プレシアやアリシア以外との会話などほとんど無いリニスに、これからのことを考えて行動しているのかは定かではない。

「あなたは……その、仮面は趣味ではないというのに何故つけるんですか？ かつこいいからとか……ですかね……？」

訂正しよう、考えての行動ではなく、山猫だったころの性がまだ残っていたのかも知れない。好奇心から聞いてみたようだった。これについてはデザイアは少しどころではなく、かなり驚いていた。仮面というものについての知識はインストールなどされているはずも無い。

また、このような時の対応方法なども、あるはずが無かった。

「いや、かつこいいなどは特に感じてはいないのだが……つける理由は簡単だ。

先も言ったが、主の命、だ」

「……プレシアの命ってことは付けさせているのはプレシアですね……。そんな趣味があったのでしょうか……」

「……私の与り知ることではない、が。

……私の顔を見ているとアリシアを思い出す、とも言っていた」

「……………そういうこと、ですか」

少しだけ道が逸れそうになったリニスも、デザイアの言葉に僅かばかりに目を見開き、主人の意図を理解した。理解したと同時に、俯いてしまう。どうやら彼女も無理をして明るく振舞おうとしていた

のが、裏目に出てしまったようだった。

「……リニス、といったか。私は、貴女と主の関係は伝聞のものでしか知らなかった。だが、先ほどの一幕を聞いていれば貴女がどれほど主を大切に思うかは分かる、つもりだ。……このようなことを私が言えた義理は無いのかもしれないが……主は……プレシア様は間違っている」と自覚しながらも、進むべき道を選ばれた。私たちは……不要、と言われその道を共に歩むことは出来ないからこそ……今は泣いてもいいのではないだろうか」

知らず、デザイアは言葉を連ねる。その言葉はもはや、自分に言っているのか、彼女に向けていつているのか分からない。彼の脳裏に思い浮かぶのは、苦悩する主の姿、微笑を浮かべる主の姿。そして、穏やかに微笑んで見せた最後の姿。

仮面で隠された瞳から、涙がこぼれ始める。デザイアは、仮面を外し、上を向いて涙する。それと同じく、リニスも感情の制御が切れてしまったかのように、静かに泣いた。

泣く顔を見られなくなかったのか、デザイアのコートの襟を引っ張って顔を埋めた。今は、この通路にはリニス以外に誰も見るものなどいない。

ましてや、主の姿も無い。仮面を外していても、何も言われないのだ。そう思いながら、泣く女性の顔を見ないように上を向き、頬を伝う一筋の涙を拭った。

どれほどの時間が流れたのだろうか。ある程度の人格形成が出来ている人にとっては、泣いている時間とは長く感じてしまう。

それと同時に、激しい疲れが伴ってしまうものだった。二人も、その例に漏れることなく、少し虚脱感を味わっていた。

二人の今の体勢は襟を引っ張られていたため、自然下に下がってしまふことにより立っていらなくなり、座り込んだ体勢のままでもたれかかるリニスをデザイアが支えるようなものに変わっていた。泣きつかれたせい、そのまま眠ってしまいそうになるリニスの声。それに焦りを感じ、引っ張っている人物の様子は違えども、先ほどと同じようにリニスを引っ張り、フェイトの部屋に向かったのだった。

――――

フェイトの部屋

ようやく、といったくらいに時間をかけて、フェイトの部屋に到達できた。その通路の間では、リニスが正気を取り戻して右往左往し始め、それを宥めるのにかかった時間が大半だった。そのため、現在の二人の距離は少し離れており、リニスは所在無さ気に視線を巡らせている。

だが、同時に、歩いている途中に仮面を被りなおしている青年に少

しの不満をもっているようだった。泣いていたせいでもあるが、顔をみていなかったから、ではあるが。デザイアは溜息を一つ零してリニスに視線を向けないようにしていた。眼が合うと、挙動不審になるのが経験則からわかっていたからだった。

今、二人の前には、ノックはされたものの突然部屋に入ってきた仮面の知らない男と、リニスに視線を忙しなく動かす少女、フェイトがいる状態だった。

当然のことながら、デザイアとフェイトには面識は無い。そのことから、フェイトはリニスに近寄る。

「リニス…あの仮面の人、誰？」

「ええと…：プレシアが連れて来たフェイトの…：あれ、ええと…：」

「…：…：デザイア、だ。君のお母さんから言われて、君の教育をすることになった」

「そう、デザイアさんです！プレシアが忙しくなってしまうと私一人だと手が回らない場合もありますから、お手伝いさんなんですよ」

「…：母さん、忙しくなるんだ…：また遊びたかったのに」

フェイトの記憶処理は、アリシアと呼ばれていた記憶のみを削除されている。また、そこに挿げ替えるかのようには、「フェイト」という名前が加えられていた。

今のところは、記憶に齟齬などは発生していない。その証拠に、フェイト、と呼ばれても反応を示している。

沈み、少しばかり落ち込んだ表情を見せるフェイトに、近付き、仮面越しながらも目線を合わせる。

「大丈夫だ、フェイト。君のお母さんは少しの間、忙しくなるだけだ。また…話せるときがきつと来る。だから…それまでは私たちと一緒にだ」

「……うん！よろしく、デザイア！」

「ああ、よろしく、フェイト……私の、守る人」

「うん？何か言った？」

フェイトの呼びかけには何でも無い、と手を振りながら答え、リニスと会話を始めるフェイトを眺めた。

努めて明るい口調で言ったせいか、驚いた表情を見せるリニスに苦笑してしまう。

フェイト・テストロッサ。何も知らない純粹無垢な少女。自分の、姉か、妹になるかもしれない人。

この子に戦闘の技術などを教えて、守るのが、デザイアに課せられた使命。だが、技術を教えるばかりが守ることでは無い。今の楽しそうなフェイトの表情。

あの表情が物語るとおり、こういう語りの場も必要であることをデザイアは感じていた。

自分の場合は、様々な経験がインストールされているせいか、自然とこういう風になっていた。

彼女は違う。今はまだ、どんな風にも染まってしまうのだ。自分の

ように、黒に染まらせるわけにはいかない。

フェイトとリニスが、思考に沈むデザイアに声をかけるまで、思考は続いた。

「じゃあ改めて：デザイア、私はリニス。プレシアの使い魔のリニスです。あなたよりも先にフェイトの教育係りになっているんですから、忘れないで下さいね？」

突然、フェイトとの語り合いをとめて自己紹介を始めた女性に、思わず首を傾げてしまう。

その首を傾げる表情がフェイトには面白かったのか、笑いながら、デザイアのコートを引っ張ってしゃがむように催促してきた。

「あのね、リニスはよろしくってしたいみたいだよ。だから、デザイアもよろしくってしないと」

しゃがんでみて、耳をフェイトの口に近づけ聞いた内容。その内容に、ついにデザイアは小さく笑ってしまった。

もちろん、そんなことを見逃すリニスではなかった。もとより、フェイトに耳打ちされている様子を見ていたのだから見逃すつもりはないが。

「フェイト…？何を言ったかは後で教えてもらいますよ？」

「っ…ご、ごめんなさい！」

眼が笑っていないリニスの笑顔に当てられてしまい、思わずデザインのコートを強く握ってしまう。

その二人のやりとりは自然であり、”フェイト”とリニスが、普通に話せていることに、安堵した。

だから、言葉は、自然と出るままに任せよう。出たところ勝負も悪くは無い、そんな気分もたまにはいい。

「リニス」

「謝っても…？はい、なんですか？」

「私は……デザイン。特にコレといった名を持たない、ただの仮面を被った男だ。こんな私でよければ、よろしく頼む」

自己紹介の言葉に、リニスとプレシアは眼を合わせて笑う。そう言われたときに返す言葉なんて決まっている。フェイトの、何かを期待する眼に、頷きを返す。

仮面越しにすらわかるほどに不安を出す青年に告げてあげよう、初めての手招き。

これからの、新しい家族を迎える言葉を。

「こちらこそ…よろしくお願いします！」

第二話 自己紹介（後書き）

……ギャグというか、ほのぼのを入れると元が酷い文章がさらに壊滅的になりました。ほのぼの…向いてないのでしょいか…。

今回は、デザイアの素を出そうとちょっとがんばりました。
背伸びした男の子みたいな感じが出ていれば幸いです。

第三話 訓練の後の…（前書き）

こんな文章を読んでいただいている皆様には感謝です。

お気に入り登録して下さった方々にはさらに感謝です。

本当にありがとうございます！

なお、今回からは少し無印のサウンドステージ02の内容が絡んでくるかも知れませんがご注意ください。。

第三話 訓練の後…

リニスとデザイアによる、フェイトの魔法訓練。フェイトにとって、それは決して楽な道ではなかった。座学での魔法訓練はまだ良かった。リニスも、デザイアもゆっくりと理解出来るように説明をしてくれていた、ということもあるが元々のフェイトも頭の回転は早い。一度、基礎を覚えると応用出来る様になるまでが早かった。また、予習についても隙は無く、教えようとしたことには既に目を通しており、自分なりの見解と解答を答える程だった。これには教育係のリニスが満足そうに頷いていたのが良い証拠になるだろう。

では、何が道のりを楽なものでは無いものになっているのか、というと、デザイアによる実技研修だ。

魔法を使えるようになったからと言って、ただ使えるだけでは意味が無いのだ。実際に使用し、技を使う術を得なくては使えるのではなく、知っているだけ、というのがデザイアの認識である。魔法に使われているうちは、魔法を導く者、つまりは魔導師になどなれるはずもない。これについてはリニスも思うところがあるのか、ある一点のルールを守るのであれば、実戦形式の研修には異を唱えてはいない。

その一点、リニス曰く、やり過ぎない。これを守ってください、というものだった。

無論、デザイアもやりすぎるつもりは無い。実技の研修なのだから、避けるデザイアに攻撃を当てることを中心とし、防御魔法や、回避の方法に広げて教えていた。行っている中で、どうやらフェイトは射撃系の魔法、近接の魔法、速度を重点とした戦闘方法が得意なようだった。避けて、攻撃するタイプであり、近距離から遠距離まで

幅広く対応が出来る戦闘タイプ。厄介なことこの上ないものであり、このタイプを倒すのに一番の方法が広域殲滅魔法というのだから尚の事たちが悪い、と教育係のリニスとデザイアは後に語る。

今は、近接時の対処方法についての実技研修を行っている最中だ。対面している二人、デザイアとフェイト。

場所は庭園の庭であるためか、少しばかり広い空間だ。ここに、リニスが結界を張って訓練所としている。

デザイアは、ただの棒のように見えるものを手にもち、フェイトは魔法使いが持ちそうなストレージデバイス型の杖を持っていた。二人の距離は、約10Mほどであり、今回はデザイアに一撃をいれることを目的とした実践型の研修。

当然のことながら、デザイアは避けるし、手に持つ棒でガードもする。魔法防御も展開済みである。

「いくよ、デザイア！」

掛け声と共に、空を駆け、ブリッツアクションを行いデザイアの死角に入り、デバイスを振り下ろすフェイト。

だが、その行動はデザイアにとっても予測済みのものでしかなかった。

「狙いが甘い、第一、わざわざいくことを相手に伝えることは無い」

すばやく振り返り、手に持つ杖でデバイスをガードして講釈をするデザイアに、距離を離すフェイト。
こんなことはこの訓練中はよくあることだ。慌てずに、少し離れた位置で魔力の形成を始める。

リニスに習ったばかりの技だけど…行く！

魔法を習い始めて半年も経たない少女が扱う魔法、フォトンランサーの発展、フォトンランサーマルチシュート。
自分から離れた位置にでも発射体であるフォトンスファイアの設置が出来、遠距離から発射できるものでもある。

今のフェイトには、魔法では二つ、飛行魔法と、攻撃魔法のマルチタスクが精一杯だった。

その中で、フェイトが考えた策、再度突撃し、フォトンランサーの遅延発射を行う、ということ。

形成も終了し、後は任意のタイミングだけ。隙を伺うことなんて今の自分には出来ないことを知っているフェイトは、焦らずに、再度デバイスでの攻撃を仕掛けた。

本来であれば、形成したスファイアを隠すなりしてから行うべき戦闘方法。だが技を覚えたばかりのフェイトにそこまで求めるのは酷かと狙いを読むデザイア。

果たして結果は予想道理であり、突撃してきたフェイトを軽くないなしてしまい、フォトンランサーは防御。

奇襲された魔法ならば効果はあったかもしれないが、来ると分かっていただけに、対処は簡単だった。

そうして、拙いながらも魔法での戦闘方法を少しずつ学んでいく。それが今のフェイトの課題だった。デザイアは、目の前に杖を突きつけられ、降参するフェイトにもう一度行うことをつけ、休憩させた。

実技も、座学もともに終わり、夕食のとき。食堂にあたる場所にはリニス、フェイト、そしてデザイアがいた。

三人の前には、リニスお手製の料理の数々。少し、料理が楽しくなってきたやいました、とは彼女の言だ。

二人が席について、フェイトを見る。フェイトも、それに答えるように言う。

「じゃ、食べよう。今日も作ってくれてありがとう、リニス」

「いいんですよ、これくらい。二人が訓練中は私はあまり手伝えませんし…」

少し沈んだ様子を見せながら呟くりニス。思うに、彼女は冷静だが感情豊か、という言い方がぴったりくる。

今も、妙なことで悩んでいるようだ、とリニス手製のスープを口に含んで味わいながら飲み込んでいるデザイアは思う。

このまま沈まれたら食事の時間に支障が出てしまう。

「いや、フェイトへのアドバイスなどの確なことを言っている。私はかなり助かっているが」

「だってさ、リニス。良かった…のかな」

「……素直にそう言われると反応に困りますね…」

デザイアがフォローに回ったつもりでも、少しの好転と混沌を残すのとなる。

それは、三人にとってはよくある日常の光景だった。リニスとフェイトが苦笑を浮かべ、仮面を付けたままではあるが首を傾げて食事を再開するデザイア。満足そうに食すデザイアを見て、二人も食事を再開した。

この夕食は、初めこそフェイトは一人で食べていたのだが、訓練が始まって間もない頃、給仕のために傍にいたリニスと一緒に食べた、と駄々をこねたのだ。これには流石のリニスも困り果て、使い魔と一緒に食事をとるわけにはいかない、と諭そうとするも子供の感情と言うものはそのようなことで納得出来るほど容易いものではなかった。

「……何を騒いでいる？」

その時に現れたのが、デザイアだった。相変わらず、仮面を被りな

がら顔のみをこちらに向けて問いかけている。

ズボンはスラックスのままだったが、研修のときと違いコートは羽織ってはいない。コートを脱いただけではあるが、カッターシャツのような服を着ている姿は二人にとって新鮮だった。

「……そうも見られると不安になるが：私はタイミングが悪かったのか？」

「ち、違うよ？ただ、いつもとは違うなって、思っただけだから」

「そ、そうですよ。いつもはコートを羽織っているのに、どうしたんですか？」

「いや、どうしたも：いつも羽織っているわけではない。フェイトとの訓練で汗も掻いた。

だから脱いでいるだけなのだが：なんだ、着たほうがいいのであれば取りに行く」

「ううん、そのままで大丈夫、です。」

「そうか：？：それはそうと私に敬語は必要無いぞ、フェイト。私も君には使っていないのだから」

「え、あ、はい。じゃなくて、うん」

フェイトの返答に、仮面越しからでは分からないが満足そうに頷いてみせ、ついで先の言葉をもう一度繰り返した。

「それで……結局、何を騒いでいた？」

「それなんです……フェイトが、一人でご飯を食べるのはイヤだ、と聞いてくれないんですよ」

「……だって、リニスがいつも後ろにいるなら一緒に食べたいから……」

「……ほう……それで？」

「……いえ、それだけです……フェイト？ 私は使い魔だから一緒に食べるわけにはいかないんですよ？」

「…………。ああ……なるほど、分かった。私がこのようなことを言うのもおかしいが……リニス、あなたは共に食事を取るべきだ」

「ほら！ デザイアもそう言ってるよ？ みんなで食べよう？」

「デザイア……あなたまでそんなことを……」

「……一人で食事するよりも複数で食事をした方がリラックスেশョン効果は高いだろう？ それに……これくらいの我侭ならば聞き届けてあげてもいいのではないか？」

「う………わかりましたよーだ。フェイト、これからは一緒にご飯を食べましょうね？」

「……うん！」

「：なら、私はこれで失礼するぞ」

「あ……デザイアも一緒に食べよう？」

不意打ちの言葉にしてみても、もう少しマシなものは無かっただろうか、などと意味のないものを思考していた。

この頃のフェイトは、デザイアのことを仮面を被る怪しい知らない人、と認識していた。

訓練を共にするようになってからも、座学はリニスの説明を補填する程度であり、簡単ながら実技をこなす様になっている頃だったせいもあり、知らない人から怖い人に変わっていたのだ。そんなフェイトが、デザイアを食事に誘った。これにはリニスもデザイアも、表に出すか否かの違いはあっても、驚いていた。

しかし、嬉しい進歩でもあることは確かだった。気持ちの変化の理由は分からなくても、デザイアが、フェイトに食事を誘われて嫌がる道理は無い。

「私もご一緒してもいいのであれば、喜んで」

返答に、嬉しそうにリニスに喜びを伝えるフェイト。それを受け止め、優しく微笑むリニスの姿。

血のつながりは無くとも、二人の間には別の絆があるように見え、少しだけ、デザイアには眩しく感じた。

三人での食事は、こうして始まったのだった。

第三話 訓練の後の…（後書き）

リニスは和み要素です。しかし資料が少ないです…彼女。

次回には皆様もご存知、あのキャラが登場…出来たらいいな。

第四話 かつての主、今の主（前書き）

書き方を色々模索中。どうやったら上手い表現が出来るんでしょうか。

第四話 かつての主、今の主

いつかと同じ、薄暗い研究室の中。いつかと違うのは、机の周りに乱雑に置かれている書物の数々だろう。

部屋の主とも言えるほど、その部屋で過ごした人物の名はプレシア。既に、健康的な肌の色をしていなかった。

病気の進行のせいではなく、プロジェクトF・A・T・Eが始まって以降、日の光を浴びる機会が減多に無かったためだ。

そのためかどうかはわからないが、彼女の取り巻く雰囲気は異様なものとなっていた。それを表す言葉、執念、そう言うべきものを彼女はまもっていたのだ。

彼女の背後には、主から呼び出され、用件を伺いに来ているデザインア。

声をかけたものの、暫く待て、という言葉のみで調べものを続ける主の姿を、何も言わずに見つめていた。

どれほどの時間が経っただろうか、ようやくプレシアが振り返り、デザインアを視界に納める。

そこには、雰囲気を通り、というべきだろう、既に、まともでは無い眼をしていた。爛々と輝きすぎている眼。

肌が白いためか、一際その眼が、印象的だった。

「待たせたわね……それにしてもお前はリニスと違ってグダグダ言わないのはいいわね……本当に、あれは生意気ね」

かつての主からは聞くことはなかっただろう言葉。やはり、既に主では無いのか。愚痴を言うプレシアの姿は、見ていて痛々しかった。

そんな姿をいつまでも見たくは無かった。片膝を付いて頭を垂れ、プレシアを視界から外す。

「主、私に用件とは如何様なものか御教え下さい。それがどのような無茶であろうとも叶えて見せます」

「………あら…なら、…別の次元世界、座標は此処なのけど…此処に魔導書があるわ。それを取ってきなさい」

プレシアが手元のコンソールを操作し、何も無い空間に文字と座標を出す。魔法の技術と科学の技術、両方が発達した結果というのに偽りは無い。

見覚えの無い座標ながら、デザイアは既に何度もこの手の任務を受けているため問題は無かった。

「承りました、主」

「………ならもう用は無いわ。さっさと行きなさい」

話は終わったとばかりにデザイアに背を向け、新しい書物に手を伸ばし始める。別段思うところも無いためか、デザイアも立ち上がり、部屋を去ろうとした時に、脚を止めた。静かながらも確かに鳴っていた足音が止まったことに不振がってか、再度プレシアが振り返る。そこには、同じように振り返り、仮面越しに見つめてくるデザイアがいた。

「：早く行きなさい、といったはずよ」

「主よ。フェイトについてはリニスから聞いておられますか」

言葉を遮るかのような、デザイアからの問いかけ。いや、問いかけと言うには語尾が強く響きすぎている。

それは、非難されているような、そんな感覚をプレシアに与えた。そして、その感覚はそのまま、プレシアには不快感になる。

「何が言いたいの」

不快感は自然、イラつきとなり、出す声も低く静かなものになる。だが、目の前の仮面の男はそれで怯むような男ではなかった。

「そのままの意味です、主。貴女の娘に対する想い、それは尊く素晴らしいものでもあると私は感じています……そして、私が貴女より託されたモノから逸脱したことを言うことも承知して言います。フェイトに、少しだけでもいい、褒めてやってくれませんか？」

「……あなたもリニスと同じ、かしら。言いたいことはそれだけね？ならさっさと魔導書を私の手元に持ってきてきなさい」

「っ……出すぎたこと、失礼しました」

これ以上は言っても変わらない、そうデザイアは想い、止めていた足を出口に向けて進みだす。

部屋を退出するまえに、既にこちらを見ていないプレシアに一礼し、言葉を投げた。

「主、リニスから言われているかも知れませんが…睡眠と食事は必ず取るようにしてください…では」

その言葉に対する返答は、帰ってこなかった。

庭園の外は、酷い雨に覆われていた。今は、食材の補給などのためにミッドチルダに停泊している最中だ。

どれぐらいになるかは分からないが、離れることになるのであれば、リニスやフェイトに伝えておかなければならない。

そう想い、リニスを探すと、イライラしながら歩みを進めている女性を見つけた。あの様子だと、デザイアの後にプレシアに会いに行ったのかもしれない。

フェイトを寝かしつけた後は、大抵が彼女のプレシアに対する愚痴を聞く時間になっていたのだから、それぐらいは把握できるようになっていた。

曰く、

プレシアは研究に集中するといって託されたが、別人のように集中するほどだとは思ってもいなかった。

人の話を聞かず、「今は忙しい」の一言で退出を命じられた時は魔力弾でも撃とうかと思った。

ご飯を作って持っていても手が付けられていない、前に持っていったものがある。

寝ていないのかふらふらしながらも実験しているから危なっかしい

等等。

聞いていると、どれもなんだかんだでプレシアを心配するようなことと、あとはフェイトと、リニス自身が構ってもらえないことに起因する不満のようだった。

酒こそ持ってこないものの、酔ってもいないのにこれだけ絡んでくるリニスの話は、話半分で聞き流すことを覚えたデザイア。彼も、起動してから大分人間らしさが出ているようだった。

「あゝもう！！いらいらいらいらゝゝゝゝ！我が主人のことながら…本当に苛立たせますね！この雨も原因でしょうか！やみなさい！」

どうやら、本当に苛立っているようだった。そんな状態のリニスに声をかけるの少し戸惑ったデザイアだったが、向こうが先に気付いてしまったようだった。

交差する視線、見つかった、と思う片方と、調度良いところに、と思う片方。どちらがどちらかは言うまでも無いだろう。

「デザイン！探していたんですよ」

「……ああ、奇遇だ。私もあなたを探していたのだから」

「私ですか？……また、プレシアからの用事ですか」

溜息を一つ零されながら、用件を言い当てられてしまったデザインは、少し驚いていた。それほどまでに、自分は分かりやすいのか。そう感じてしまうだけに、人らしくなっていることを喜べばいいのか、分かりやすい態度を嘆けば良いのかは分からないが。黙ってしまったデザインを見上げ、首を傾げるリニス。二人は、頭一つ分ほど身長差があるのだから致し方ないことかもしれない。

「すまない、少し思うところがあって考えていた。……リニスの言うとおりだ。また少し留守にする」

「…はあ、わかりました。フェイトには私から伝えておきますから、早くいって、早く帰ってきてください」

「…善処する」

返答に、苦笑を浮かべて手を振ってくるリニスに片手を上げること
で返答し、転送ポートに向かって走り出す。

存外、此処が好きなようだ。見送られながら、一人、呟いた。

「行っちゃいましたか…」

コートを翻し、曲がり角で姿が見えなくなるまでその場で見送った。それまで振り続けていた手を下ろし、身体の前で指を組む。

「さて、フェイトを寝かしつけないと…雨で不安がって眠れないなんてことだったら可愛いんですけどね…あの子の場合は夜更かししてしまいますし、本でも読んであげましょうか！」

気分を切り替えるように、その場でステップを踏み、方向転換を行い、書斎、ついでフェイトの寝室に向かった。

途中、遠くで狼の遠吠えを何度か聞きながら、フェイトの寝室の扉を叩く。

「フェイト？本を読んであげましょう……フェイト？」

叩いても、声をかけても返事が無い。普段のフェイトであれば、まだまだ眠る時間では無い。むしろ、魔法の勉強を行うような時間帯だった。

不審に思ったりニスは、扉を開けて、中を見る。そこは、真っ暗な部屋であり、人がいるような気配は無かった。

「いない…？もう、何処にいったのかしら…：念話で呼んでみますか」

眼をとじ、意識を集中させてフェイトにチャンネルを合わせて、念話を飛ばした。

――フェイト、フェイト？

――あ…リニス？…ごめんなさい…今、外なの。

――そ、外！？こんな時間に外だなんて…しかもこんな雨の中、一体何を？

――その、遠くで…犬の声がして…きてみたら、狼がいたんだけど、なんだか様子がおかしくて！それで…

――待って、フェイト…：念話だどうにも要領が得ません。そちらに行きますから、そのまま動かないで下さい

――…分かった。早くきて！

念話の最中には既に、動き出していた。サーチャーを飛ばして、場所の特定を行い、急ぎフェイトの場所まで向かう。

今のフェイトは、動物に一切触れさせていないから感情移入などもしやすいのかもしれない。先ほどの様子だと、何かの病気にかかっている可能性だってある。

考えれば考えるほどに、最悪な可能性は出てくる。狼の群れで、フェイトに襲い掛かる、という可能性が無いことだけは救いだ。

だが、周りには何頭か成体の狼もいる。なのに人間が近付いても何もしない、何かのわけアリ意外には考えられなかった。

「ああ、もう！何故こんな時に居なくなるんですか！」

今の彼女には、愚痴を言いながらフェイトの場所まで急行することしか出来なかった。

第四話 かつての主、今の主（後書き）

あの人が出てくるとかいったのに出せなくてごめんなさい。主人公が居ないので、ほとんどシーンには変更が無いためちよつと無理やりカットしています。

使い魔になる経緯はサウンドステージ02です。全部書いちゃうと怒られそうという言い訳を残します。

ここまで読んでくださった方々、有り難う御座います。
また、次話もよろしく願います。

第五話 繋がり（前書き）

すみません、遅れた上に少し短いです。

第五話 繋がり

プレシア・テストロッサから魔導書を取ってくるように言われた日から一週間。

魔導書を奪う、それ自体はスムーズに出来たが奪った後が問題だった。

奪う前の侵入者対策を設置しているのではなく、奪われた後の侵入者対策が設置されていたのだ。

そのトラップの破壊、及び追跡してくる魔導師達を振り切るのに思った以上に時間がかかってしまった。途中立ち寄った街で、お土産などを探していたことも遅れた理由に含まれているのだから自業自得である事は言うまでもない。

幸いにも物々交換で買い物を行う事が出来たので、フェイトにはリボンを買う事が出来た。

今のフェイトは、ゴムで纏めているのみ。

女性の機敏などには疎いデザイアだが、待たせた分を詫びる意味でプレゼントを送ることが出来るくらいには、常識を身につけていた。主に、リニスの手によって。

過去、何度かプレシアからの命令でふらりといなくなる事があるデザイア。それに伴って、たまにはあるが、リニスがついてくる事があった。

その時に、遅れたフェイトに対するお土産や、女性に対する態度、接し方、その他諸々の教育を受けたのである。閑話休題。現在、デザイアの手にはプレゼントの入っている袋と、魔導書がある。さす

がに、いきなりフェイトやりニスのところに行くわけには行かない。そう考え、デザイアの足は、主・プレシアの居る研究室に向かった。

――――

研究室内

そこには変わらず、魔導書をあさり続けるプレシアの姿があった。変わったことといえば、魔法実験を行った結果か、よく分からないものが散らばっていることだろうか。

「主。デザイア、只今戻りました」

「デザイア…？…ああ、…遅かったのね」

「はっ……申し訳ございません」

「…言い訳の一つでもしようものなら考えがあったのだけど…それもしないのかしら」

「…私が遅れたこと、どれほどの言葉を並べようとも、それは覆せない事実です」

「ふん……もういいわ。下がちなさい」

そういい残し、受け取った魔導書に目を通し始めるプレシア。だが、デザイアはその場から動かなかった。改めて、研究室を見回してみ

たが、リニスが持ってきたであろう食事に一切の手が加えられていないのだ。そして、湯気などが立ち上っていない事から、置かれて直ぐではなく、ある程度の時間が経過しているのだろう。

「……なに、まだ何かあるのかしら」

「……はい。主、最後に食事をされたのはいつですか」

「……そんなことを言う為に残っているの？知らないわ、そんなこと。もういいから下がちなさい」

「……失礼しました」

出口に向けて、足を運ぶデザイア。その握られた拳からは、何を思っているのかは想像には難くない。

だが、そんな後姿でさえも、プレシアの眼には入っていなかった。背中合う、二人、それはまるで、今の二人の想いが形になったかのようにだった。

扉をくぐり、いつもの溜まり場に向かうデザイア。心なしか、その足取りは速い。

手に持つプレゼントの重みが、今は唯一の救いのように感じられていた。これがあるうちは、無茶はできない、そんなことを考えながら見えてきたいつもの部屋。デザイアがそこに足を踏み入れると、一対の視線を感じた。その視線の先には、知らない少女。いや、犬のような耳をつけていることから使い魔なのかもしれない。思考し

ているうちに、少女がデザイアを見て首を傾げる。
その姿を見て、デザイアも同じように首を傾げた。

少女の前で、首を傾げる仮面を被った青年。怪しいことこの上なかった。

「……あ……う……？」

「…？」

「だ……え……？」

「……そうか、まだ満足に話せないのか…」

「うー…？」

「ああ、すまない。私はデザイア。デ・ザ・イ・ア」

「であああー？」

聞き取ろうとしていた体勢のためか、耳を少女に向けて前屈みになっていただけに思わず、倒れそうになってしまった。そのまま座り、少女の前で座るデザイア。未だ、何とか発音しようとしている少女を見て、微笑ましくなった。

「デザイア！」

「…ああ、今はそれでいいだろう…君の名前は…分かるか？なま・え、だ」

名前。そう呟くと何か嬉しいことがあったのか元気に立ち上がり、両手を広げた。

突然の行動に驚きながらも、続く言葉に得心がいく。

「おー！あるふー！！」

名前が言えることが、嬉しかったのだろう。

そうしていると、リニスの声が聞こえてきた。講習の補足などを話していることからフェイトも一緒なのだろうか。終わったあとまでの補足を真面目に聞くフェイトが凄いのか、その補足ですらも充分講習できそうになるリニスが凄いのかは少々悩むところではあるが。

「…という訳ですから、先の魔法を使用する際には詠唱の短縮も可能になる、ということなんですよ」

「そっか…なら次の戦闘訓練で試してみるね。ありがとう、リニス」

「ふふ、どういたしまして。それにしてもデザイアは遅いですね…直ぐ帰る、とか何とか言っておきながらまだ帰ってきません」

「……リニス、デザイアのことが心配なの？」

「え？え、ええ、それはもちろん心配ですが……別に変な意味は無いですよ？」

「うん、大丈夫、分かってる」

少し、しょうがないなあ、という表情をするフェイトを見た。フェイトとしての生を受けてまだ数年。

そのような子供に、そういうことで苦笑を浮かべられるのは果たしてどうなのだろうか。意味も無くそのようなことを思考してしまう。仮面の下、見えないところで眉を顰めていても口元に浮かぶ歪な苦笑はばれてしまっていたのか、アルフに頬をつつかれた。

調度、そんなときだ。デザイアの姿を、フェイトとリニスが見つけたのは。

見つかった時に、フェイトが少し焦っていたのが気になった。

リニスは、形容しがたい、何をやっているのかを咎めるような、安堵したような、そんな表情だった。

「くちー！つん！」

「……アルフ、少し待て」

そんな雰囲気全台無しにするのは、そんな雰囲気を作り出した張本人だった。

先ほどの表情は何処に行ったのか、苦笑を浮かべるリニスとフェイト。

何はともあれ、この言葉を言わねば何も出来ない。そう考え、言葉

を出す。片手にアルフを抱きながらだったため、少しばかり格好は付かないが。

「ただいま。少し遅れてしまつてすまなかつた」

「お帰りなさい。それと、気にしないで下さい。その間、フェイトとたくさん話せたり出来ましたし」

「お帰り、デザイア。リニスから新しい魔法を習ったから…次は覚悟して」

「んー…?…かえりー!」

三者三様、一人は分かっているのかいないのか。だが、確かに自分の帰る場所だと感じた。

今はこれでいい。主の考えに反しているのかも知れない。だが、こういう守る、というのもあるだろう。そんな考えを、浮かべた。

第五話 繋がり（後書き）

この物語はほのぼのとシリアスを目指して………ました。

第六話　く成長く（前書き）

更新に時間を使ったにも関わらず…内容が薄い…です。

第六話　く成長く

そのまま、フェイトとアルフは今日の模擬戦の戦術の組み立てに入っていた。

時折漏れ聞こえる言葉からは

「アルフは…前衛…囧で…」

「今日こそはあいつに一泡吹かせてやるんだ！」

などなど、せっかくフェイトが小声で話しているのにその意味すら無くすように大声で叫ぶ。

口調などはある程度大人じみてきたところもあるが、未だに精神面では子供のままのようだった。

「…リニス。情操教育などは貴女に任せていたかと思うが…アルフには？」

「…………一応横で聞いてはいる、筈なんですけどね」

「そうか…子供ゆえの負けず嫌いだと思うのだが、さすがにあれでは…な。」

少し気にかけたほうがいいと思うが…」

「…………ふう、そうします」

「すまないな、私にはその手のことが出来ないことで苦勞を掛ける」

「デザイアに任せると戦闘狂に育ちそうですからね」

「違うない」

そうして、二人してまた微笑み合う。僅かながら、こういう談笑の時間は心休まるときだった。もっとも、その時間も元気な子供の声で遮られるのが常だったが。

「デザイア！あたしらの準備は出来たよ！早く早く！！」

声に振り返り、手を挙げて返答を返す。傍らにいていた無骨なストレージデバイスを手に取り、空中を歩く。視線を下に向けると、変わらずに微笑を浮かべているが、どこことなくあきれている雰囲気を出すリニス。

「では、私は夕飯でも作ってくるとしますか」

「…ああ、頼む」

「いえいえ、戦闘訓練では貴方のほうが上手なんですから気にしないで下さい。

…私からは…そうですね、やり過ぎないように、とだけ」

「承知」

そういい残し、アルフと、少しだけ疲れた顔を見せるフェイトのもとへ向った。

おそらく、作戦を立てるときにアルフに振り回されたのだろう。そうして人間は成長していくのだ、などと

最近リニスに振り回されている気がするデザイアは思った。

「すまない、待たせたな」

「…デザイア…今日もお願いします」

「やるよ！今日のあたしは一味違うんだ！」

「アルフ…そういうこと言ったら警戒されちゃうよ」

「あ…ご、ごめんフェイト…デザイア！今日のあたしは今までどうりだよ！」

「…………アルフ、まだ幼い君に言うのは酷かもしれないが…今の会話のやり取りに疑問を持って」

「へ？」

「ごめんなさい、デザイア…言い聞かせておくから」

「いや、まだ一ヶ月だろう？なら仕方ない。…が、教育はしておくように」

「…うん」

フェイトとして生を受けてまだ一年と少し。アリシアとしての記憶があることを差し引いても

精神面での成長は同年代の子供たちよりも早い。それが喜ばしい事かどうかは分からないが。

今も、アルフが迷惑を掛けていることを自覚しているし、それは主人である自分の教育不足であることも理解している。

どうにも申し訳なさそうな表情を変えないフェイトの頬を軽く引っ張ることで無理やり表情を変えさせる。

いきなりのことで目を白黒変える姿を暫く楽しむのも良かったのかもしれないが、直ぐに手放した。

引っ張られた頬をさすりながら首を傾げ、疑問符を浮かべるフェイトを無視し、アルフを呼んだ。

「さて、では無駄口もここまでだ。準備はいいな？フェイト、アルフ」

「えっ…あの…はい…何で引っ張られたんだろう…」

「あたしは前から準備完了だよ！」

「……なら…始めようか」

フェイトの眩きは流した。もし、フェイトが理由を尋ねたとしても子供が浮かべる表情では無いものを崩しただけだ、とデザイアは言

うだろう。

二人からの返事に頷きを返し、距離を離れた。

「いくよ、フェイト！今日こそ勝って、あの仮面の下を拝もう！」

「うん：私もどんなのか見てみたいから……全力だよ、アルフ！」

そう、この模擬戦、モチベーションを上げる為に色々のご褒美が用意されている。

今はまだ、デザイアは魔法の使用は身体能力の向上以外ではしない、というハンデがある状態での模擬戦。

そのデザイアから一本取れば仮面を取る、というのはリニスが発案、乗ってきたのがフェイトだった。

アルフはそこまで気にしてはいないようだったが、負け続けているためか、目的として掲げていた。

なお、そのほかに細かい褒美があり、デザイアの評価によっては明日の夕飯が若干豪華になるのだ。

これにはアルフが食いついた。それ以降からだろうか、張り切るアルフが見られるようになったのは。

「先手！必勝！」

いつものように、突撃してくるアルフ。これに対しては半身になることで回避。

その直ぐ後ろ、アルフに隠れるように突撃してくるフェイトの姿。近接戦闘でのコンビネーション。以前までは見れなかった動きに成長を感じた。

だが、その程度で崩されるようでは騎士とは言えないだろう。

手に持つストレージバイス——名前は無い——剣を薙ぎ払い、突撃の勢いを殺してよけた。

フェイトを迎撃していた間に、後ろからアルフの魔力が高まる。

「チェーン、バインド!!」

勢いのいい声とは裏腹に、構成がまだ甘いのか出てきた鎖は二本のみ。

薙ぎ払った剣をそのままに後ろに回転し、バインドの迎撃に出る。

一本は破壊に成功。もう一本は腕に巻きつかれてしまった。

「かかったあ! フェイト!」

「——雷纏いて、貫け! 剛雷! サンダアア! スマッシュアア!」

声に振り向き、上を見るとデバイスの先から迸る魔力と、雷。

バインドブレイクを行っても回避には間に合いそうに無いところまできている。

第一、バインドブレイクを使用してしまえば、デザイアの負けになってしまう。

――アルフのバインドといいフェイトのこの魔法といい！リニス、いつの間に教えていたのだ！

今までの相手からの予想外の出来事。慢心か、油断か。デザイアの敗因はそのどちらかであることは明確だった。

連携を見せた二人の勝利、と言い換えてもいいかもしれない。

鎖の巻きつく片腕はそのまま、空いている手で剣を前に突き出す。時間が無いので強固な盾は用意できないが、まだまだ稚拙な魔法を防ぐくらいなら出来る。

三角形の魔方阵が目の前に出たと同時、光がデザイアを貫いた。

「……やった？」

「まだだよ、アルフ。最後まで気を抜いたらダメ。当たる瞬間に何かしていたから…バインドの準備をしておいて」

「魔法を使ってないなら直撃を食らってるはずだよ、いくらデザイアでも……ピンピンしてるみたいだね、あいつ」

光の名残が消え、目を凝らして見ると前からはいつも通り、仮面をつけているデザイアの姿。

いつもと違うのは、手に持つデバイスに白い魔力光が見えるくらいだろう。

「…正直、君達の成長速度は目を見張るものがあったが…ここまでとは。リニスの教えもあるだろうが、よく頑張った」

「え…それなら!」

「ああ、思わず防御魔法を使用した。当初のルールでは…私は魔法を使わない、だった。ゆえに、私の負けだ」

「っつ! ……フェイト! 勝ったよ! デザイアに勝ったんだ!」

「アルフ! やった!」

初めての勝利に歓喜の声を上げる二人の様子に、本当に成長を感じていた。

連携を考え付くようになるのもそうだし、フェイントも混ぜてきた。基礎は出来ていると判断しても問題はないだろう。

次の段階、本格的な魔法訓練。しかし今は、二人の喜ぶ姿に水をさすのもためらわれた為、見守っていた。

「フェイト! 勝てたんだから、デザイアの仮面の下がついに見れるよ!」

「あ……そうか、そうだね！何で仮面をつけてるのかも言ってくれるかな…」

「…楽しみにしているところすまないが、いいものでも何でも無い。不通の顔だ」

「隠されたものは見てみたい！ってとき。なら早くっておくれよ」

「何に期待しているのかは知らないが……な」

被っていた仮面に手をかけて、ロックを解除していく。目の前を見ると期待しているように見上げてくる二対の瞳。

楽しみにされるのは嬉しく思うが、そこまで気にかけるようなことなのか、少し判断に苦しんだデザイア。

———そういえば…私もこの娘達と同年代か……無限の欲望も余計な知識を入れてくれたものだ。

ため息と共に仮面を取り外し、崩れてしまった髪を振り払う。

出てきた髪は、金色。これは仮面の後ろから肩ほどもで伸びているから分かる。顔はどんなのか、と身を乗り出して見ようとする二人の子供。

仮面の下に隠された顔は、プロジェクトF・A・T・Eの産物ゆえかフェイト、いや、アリシアに似ていた。

かと言ってそっくりそのままではない。男性体のせいかな、モデルと

なった人物そのままの女顔ではなく、面影が残るような中性的な顔立ち。

その容姿は、凛々しい、という言葉当てはめるのが丁度良いのだろう。

「へえ…なかなかいい男じゃないか。それに何処となくフェイトに似てるねえ…」

「…うん、確かに…私がおっきくなった感じ…？でもかっこいいよ」

「…ありがとう、と答えるべきか？それとアルフ、言っていなかったか？私はプレシアの親戚だ。似ていることもあるだろう」

「いや、聞いてないし」

「私も聞いてないかな…母さんの親戚なんだ。じゃあ叔父さん？」

「む…リニスが伝えていたかと思ったが…すまない。…しかし叔父、か。…そうなる、か。」

「デザイア叔父さん？」

「今までどおり、デザイアにしてくれ…」

このままだと色々言われ続けると判断したデザイアは仮面を被り直し、リニスの待つ食堂へと足を向けた。

「ほら、いくぞ。リニスをあまり待たせると…後でうるさいぞ」

「あ、もう付けてる…。ってそうだね、ご飯が冷めちゃうし…いこう、アルフ…ってアルフ？」

「あの娘なら先に行っているが」

「…い、いつの間に行ってたんだろ…」

「ふえいとー！でざいあー！早く行くよー！」

遠くから聞こえてくるアルフの声に、二人とも思わず笑みを漏らして後をついていった。

「リニス！リニス！聞いておくれよ！あたしらでデザイアに魔法を使わせたんだよ！」

「おや、勝てたんですか。アルフのバインドが上手く行けば虚をつかれるだろうとは思っていましたが…」

容易く引かなかったんですねえ、デザイア。油断してたんですか？」

「……成長に気づけなかった。それが全てだ」

「…デザイアは素直に認めすぎて面白くありません」

「リニス？…えと、その言い方はあんまりじゃないかな…？」

「…私もからかう相手が欲しかっただけですよ、フェイト。ほら、デザイアも気にした様子も無いですし」

視線を向けるよう促すリニス。それに釣られてみると、何を言われているのか良く理解しておらず、小首を傾げて席につくデザイアの姿があった。
もちろん、アルフは既に席に座っており、両手にスプーンとフォークを持って準備万端で待ち構えている。

「…アルフが待ちくたびれて騒ぎそうなので夕飯を用意しますね。フェイト、運ぶのを手伝ってくださいますか？」

「うん、今日のご飯って何？」

「今日はですねー、デザイアが負けるかな、と思ってちょっとだけ豪勢にしたんですよ。」

メインは…ハンバーグですよ」

「やった！」

嬉しそうに笑うフェイトの表情。楽しみで仕方が無い、といった感情を現してくれるのは嬉しいことだと、リニスは思っていた。

それはデザイアも同様であり、視線を二人に向けていたためか、口元は微笑を浮かべているほどだ。

それを目ざとく見つけたアルフによって直ぐに消えてしまったが。

「デザイア：あんた、仮面越しに笑っているのを見ると変な人に見えるよ？」

「…そういう君はリニスのハンバーグが楽しみで尻尾を振りすぎているように見受けるが」

そう、先ほどの会話が聞こえていたためかどうかは分からないが、椅子から垂れる尻尾のふり幅が多きくなっている。

水平から水平に、速度は決して速くは無いが、楽しみにしているのが丸分かなりなくらいに振っているのだ。

「こ、これは！…しょうがないじゃないか、リニスのご飯は美味しいんだよ。」

その美味しさでさらにハンバーグだよ！この凄さがわかるかい？」

「あー……いや、すまない。私には分かりそうにないな」

「美味しさ二倍！それを知らなかったなんて…デザイア。あんた、それは一日三回は損してるよ」

「…見事に食事の回数だな」

「そりゃそうさ。それだけリニスの料理は美味いってことだよ」

なぜか、誇らしげに胸を張るアルフ。思わずため息をついてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7179/>

魔法少女リリカルなのは－仮面の騎士の望むもの－

2010年10月23日04時38分発行